龍灯

第５０号

発行所　大阪市史跡 龍渓禅師墓所 雲竜山 九島院
〒550-0022 大阪市西区本田3丁目4番18号
TEL 06(6583)2725　FAX 06(6583)0908

発行者　第二十五世住職　奥田啓知（智證）

お寺が栄えることは檀信徒の皆様の喜びであり

団塊定年

定年後の人生設計とは？

戦後の高度成長を支えた世代（一九四七～一九四九年生まれの団塊の世代）が、二〇〇七年以降、毎年、大量に退職ラッシュを迎えます。

この団塊定年が社会問題となるのは、技術継承、労働力不足年金破綻、熟年離婚など、さまざまな影響を与えるからです。

夫の定年を機に妻が離婚を申し出る熟年離婚を題材としたテレビドラマ「熟年離婚」（テレビ朝日）が平均視聴率一九・二％の高視聴率を稼ぎました。

また、年金分割制度改正（平成十九年四月一日施行）にともない、離婚後に夫の年金の半分を手にできることとなり、結婚二十年以上の熟年夫婦の離婚が急増すると見られており、二〇〇七年問題に対する関心の高さが表れた格好だといえます。

熟年離婚にいたらなくても、「主人在宅ストレス症候群」という病気が問題となっています

定年になった夫が常に家にいるようになったことで、妻が強いストレスを感じ、体に変調ををおこし、高血圧、胃潰瘍、肝機能障害など、さまざまな症状となって現れるそうです。

二〇〇四年の統計では日本人の平均寿命は男子七十八・六歳女子八十五・五歳です。六十歳定年後、十八年～二十五年という余命をいかに生きるか、それはますます社会の大きなテーマなのです。

「八大人覚経」というお経のなかに、「多欲は苦なり、生死の疲労は貪欲より起こる、小欲にして無為なれば身心自在なりと覚知せよ」（欲望が多いことはつらいことである。一生の間のさまざまな疲れは、すべて物事に執着し、むさぼることによって起こる。多くを望まぬ心を常に保つことによって、心身とも安らかで自由であることを、はっきり知ることである。）とあります。

定年後は、今までと同じ条件では生きられないのです。年相応に体力は衰え、記憶力も衰えてきます。このことを認めなければなりません。

「無為」とは何もしないことではなく、あるがままの姿を、あるべき姿として受け取っていくことなのです。

ただむなしいと嘆き悲しむのではなく、一人の人間として、何かに打ち込んでいくことが大事なのです。なにか「世のため人のために自分を与える」という考えをもち、生きていくべきではないでしょうか。

昨今の世情不安のなかでは、犯罪や事故、災害に巻き込まれあっと言う間に死んでしまい、自分の意とする死に方が選べないことが多いものです。

人生の最後には、必ず「死」がやってきます。人間としての生き方、いいかえれば「納得のいく死に方」「大往生」のことを考えれば、ボヤボヤしてはおれないのです。

「身心自在なりと覚知せよ」とは、そうした生き方こそが「大往生」につながるのですから。

お寺が栄えることは檀信徒の皆様の喜びであり

九島院人物列伝②

桂三枝師匠と九島院

―稀代の落語家　繁昌亭設立の功労者―

今夏、上方落語の定席「繁昌亭」が、大阪市北区の天満宮敷地内にオープンします。大阪の落語の寄席は、終戦前に姿を消してから、復活するのは、実に六十年ぶりだそうです。

上方落語協会を率いるのは桂三枝師匠。「新婚さんいらっしゃい」をはじめテレビに舞台、映画などで活躍する一方、数多くの新作落語を生み出し、創作落語のパイオニアとして文化庁芸術祭演芸部門大賞、上方お笑い大賞など数多くの栄光に輝いています。

三枝師匠は、本名を河村静也といい、中学生の時からは港区の市岡に母親と二人でお住まいでした。

先代弘忠和尚は、よく三枝師匠のことを話していました。

河村家には、お盆にお参りをしていたそうです。ただ、どういう理由で当院とご縁ができたのかは判りません。師匠が中学一年の時に、お母さんが再婚されましたが、その義父も中学三年生で死別されそうで、そのお葬儀からとも考え、当院の記録を見ましたが載っていませんでした。

師匠は、市岡商業高等学校に進学し、そのころからテレビの演芸番組に漫才でよく出演されていたそうです。そして一年浪人、関西大学商学部に進学し、『落語大学』というオチケンを創設し「浪漫亭ちっく」という芸名で大活躍されていました。当時、当院のお彼岸の法要のあと、師匠が落語の一席をされたと古い檀家の婆さんに聞いたこともあります。

先代弘忠和尚は、大の落語好きで暇さえあれば、関西大学の『落語大学』のクラブボックスへ遊びに行っていたそうです。（家内の言）

師匠が、大学四回生のとき就職も内定しているのに、桂小文枝師匠のもとに弟子入りするというので、お母さんから和尚に、やめるように説得してくれと言われたそうです。

その後、河村家は池田の井口堂に転居されましたが、九島院の代参として、伊丹の常休寺の和尚（弘忠和尚の甥）が引き続き参っていました。

師匠が二十八才のとき、ラジオ番組『ヤングタウン』のアシスタントの高橋真由美という十九歳の女性と結婚されました。彼女は池田にある浄土宗寺院の娘で、それを機に当院とは、縁が切れました。

小生は平成十三年五月から三枝師匠が主催されている上方文化人川柳の会『相合傘』に、縁あって参加させていただきました。その句会の席で三枝師匠に、挨拶方々その事をお尋ねしましたが、「さあぁ、どうでしたかねえ？」と判らないようでした。

小生も龍谷大学の落研出身で、弘忠和尚の目にかなったのかなと思います。稀代の落語家と縁のあったことを当院の記録に留めるため、この記事を書きました。

檀信徒の皆さまへ

○寺院案内の作製

目下、春彼岸発行を目標に、九島院の寺院案内を製作しています。

昨今、郷土史ブームで、巡検（史跡めぐり）で来院される方が多くなってきました。手製のものはありましたが、カラー印刷の本格的なものです。中国山河圖し、九島院の宣伝と布教伝道活動にあたりたいと考えています。

それぞれの漢詩は、小生が師事している関西吟詩文化協会の原江龍先生、中谷松苑先生に吟じていただきCD録音をし、模絵の情感をより伝えようと企画しています。

両先生は詩吟大会で全国一になられた先生方です。

話せば、心も軽くなる

仏教テレホン相談体験記

大阪仏教テレホン相談室で、昨年十月から月一度、相談員のボランティアを始めました。「話せば、心も軽くなる」とのキャッチフレーズで、仏事相談を筆頭に、さまざまな人生相談を、仏教十宗派の僧侶が交替で担当しています。その体験報告です。

（質問）　六十歳の女性。夫は六十五歳。二十年前から別居。夫は三軒隣の実家で暮らし、隣は息子家族が住んでいる。最近、二度目の離婚裁判をおこされ、調停が不調に終わった。別居期間は毎朝電話もくれるし、買い物にも付き合ってくれていたので、世間の夫婦より心の絆は深いと思っていたのにショックを受けた。夫の気持ちが理解できない。男って、身勝手だわ。

（答え）　男女を問わず、六十歳という年齢は、人生の終末を考えるものです。やり直しのできる最後のチャンスなのです。昨今、熟年離婚が話題となっていますが、昔でも誰しも考えたのではないでしょうか。

現在は豊かになり、女性の生活力もできたので、そんな風潮になったのでは。

ご実家からの手紙がもとで別居されたとのことですが、二十年もの間、なぜ修復されなかったのでしょう。実家がからむと、問題が複雑になるので、二人だけで話し合い、解決されなかったのですか。

ご主人の優しさに甘えて、その寂しさに思いやらなかったのではないでしょうか。ご主人は、煮え切らずにズルズルと別居の今の生活を送っていただけで、決して満足していたわけではないはずだと思います。

寂しさを癒してくれる女性が出来るのを待っていたのではないでしょうか。そんな女性ができたからこそ、二度目の離婚裁判をおこされたんだと思います。

修復が不可能な段階だそうですので、奥さんも自身の将来を考えて前向きに生きていかねばなりませんね。

※相談は一時間半を要しました。奥さんは、ご自身の生き方に気づいておられるようでした。結論はでませんが、話すだけで少しは心も軽くなったのではないかと思います。

の襖絵も載せ、お寺の最新の情報を盛り込みました。

○襖絵題を漢詩吟詠

本堂に襖絵を新調したため、傷んではいけないので法要などのとき撤去しますたいへんな作業です。

押し入れの襖をはずすと中がまるみえですので、予備の襖六面を新調しました。

その六面に、それぞれの部屋に因んだ漢詩を、春秋会書家の高園柏邨先生に揮毫していただきました。

将来的には、インターネットのホームページを作成

○絵本の製作頒布

小生の所属する大阪市仏教会大阪青少年教化協議会で、創立四十周年を記念して、『お釈迦さま』という絵本（左絵）を製作しました。

書店でも、定価千円で販売していますので、一度ご覧下さい。お釈迦さまの生涯をわかりやすく表現しています。

なお、説明文は英語とヒンズー語でも書かれています。とてもユニークな絵本です。春彼岸法要の施本として参詣者に配付の予定。

「お釈迦さま」仏教童話絵本の表紙

ご開山龍溪禅師の喜び、誰よりも御本尊の喜びです！

編集後記

▼「一寸先は闇」とはよく言ったものです。昨年あれほど持て囃されたホリエモンが、破滅の崖っぷちに追いやられています。

▼丁度、ヒューザーの小嶋社長の国会での証人喚問と同じ日に、ライブドアに検察の強制捜査が入りました。

▼マンションの耐震強度「偽装」、今度は「偽計」取引。

▼相田みつお氏の詩に、「人のためと書いて　いつわり　と読むんだねえ」とあります。両者とも自己の利益のために嘘を重ねた結果なのです。

▼「うそつきて　あとあじわるき　みずからに　べんかいのうそ　さらにかさねつ」という詩もあります。

▼人は騙せても、自分自身は決して騙すことはできません。よほどの悪人は別にして、たいがいの人は、嘘をつくと顔にでるものです。

▼知っていながら悪い行いをするのと知らずにするのとでは、どちらが禍（わざわい）いが大きいか。

▼罪と禍とでは、ちょっとちがっていますが、世間の常識では、知っていて悪事をするほうが罪は重いとします。

▼仏典には、知らずにやった悪いことのほうが禍いが大きいとあります。焼けた鉄丸を、知らずに摑んだ者と、知っていて摑んだ者とでは、前者のほうがひどい火傷（やけど）をするから、と説明をしています。

▼両者ともきっと悪事を知っていて行ったような気がしたい。まだ、真人間に立ち返る余地があるからです。

▼小紙も今回で五十号になりました。五十回忌で弔い上げにならぬよう、引き続き精進していく所存です。

●落書き

この正月三日、朝のお勤めの折り、お向かいの浄土真宗のお寺の掲示板に数人の人だかりができていました。

なにごとかと覗いてみると、掲示板のうえに、ガムテープで落書きが張りつけてあったのです。それには、「クソ坊主、バーカ、何を訳のわからんことを書居る（もっと修行せい）※原文どおり」とあります。なぐり書きでしたが、年配の者が書いたようでした。どうやら、お寺の掲げた伝道文書が気に入らないようなのです。

それには「初春や光　身に沁（し）む　摂取不捨（せっしゅふしゃ）」と俳句が書かれていました。他の真宗寺院にも同じものが貼ってあり、教団本部からの印刷物でした。

その意味は、「肉眼では見えないけれど、如来さまの光が念仏する衆生の身に沁みこんでいる。阿弥陀如来はどんな衆生もお救いになり、けっして捨てることはありませんよ。」というものでした。

あるお寺で、夜に掲示板が大きな石で叩き割られたそうです。それには「働け　働け　もっと働け」と書かれており、その文句に腹をたてた通行人がしたようで、失業中か、働きたくても何らかの事情で働けない人が石を投げたようでした。

当院でも、ずいぶん前のことですが、「人間は二度生まれる。一度は母から・・」という文言に、ある新興宗教の信者の女性が文句をつけてきたことがありました。

その一言が人生をかえることがあります。ましてや書かれたものも、読み手にその真意がつたわらなければ、掲示伝道の用がはたせません。自戒しなければと思います。

「つまづく石も縁のはしばし」惜しむらくは、落書きではなくお寺の門を叩き仏縁を結び、摂取の光を感得されんことを祈りたいものです。

ご案内

山門会・お彼岸法要

３月２３日（木）
午後１時半より

※ご先祖供養です。宗旨に関係ありません
ご回向お申し込み下さい。

九島院宝物『中國山河圖披露』

ご開山龍溪禅師の喜び、誰よりも御本尊の喜びです！